

短信

ここがおもしろい！ 今の学校、今の子どもたち

熊谷 正敏

一 はじめに—シンポジウムのねらい

去る一〇月、福岡県田川市にある福岡県立大学を会場として、学生（大学生・大学院生）による学校シンポジウムが開かれた。「子どもたちのために、おとなとして、社会としてできること」を明らかにしようというスローガンのもとに開かれた福岡県人権・同和教育研究大会の特別講座の一つであり、多くの大人たちに混じって学生の参加者も見えるなか、一〇人の学生シンポジストがステージ上にいた。この学生たち、単に選ばれてステージに上がっていたのではない。公立小中学校や不登校の中高生が集まるフリースクールにボランティアとして関わっているアシスタントティーチャーの学生たちである。学生による学校シンポジウムに至る経緯とシンポジウムの様子をレポートすることで、差別の現実から深く学

び、未来を切り拓く教育の確立・「人権のまちづくり」への可能性を探ってみたい。

二 教育大学金先生との出会い

金川校区のみならず、旧産炭地・筑豊全体の教育課題として大学進学率の低さがある。高校の進学率は、学校での学力保障の取り組みや様々な教育関係機関の連携・努力の成果で全体的に上昇し、同和地区内外の格差も縮小してきているものの、大学の進学率になると三倍近い格差がある。その背景として大きく三つの要因が考えられる。

一つめは経済的な要因。二つめに学力的要因。この二つに関しては奨学金制度の改善や学力保障の取り組みの成果が見られる。三つ目、学力格差以上に大きく影響していると思われるのが環境の違いである。保護者層だけ

でなく、近所の青年たちにも大学生・大卒者が少ない。子どもたちの進路意識の選択肢の中に「高校」はあっても「大学」がある子はきわめて少ない状況だった。保護者と話しても「高校は行かせるけど、その後はどこか就職できればいい」という意識が多数を占めていた。就職に関して高卒の求人が少なくなっているにもかかわらず、保護者の意識はなかなか変わらないでいた。

大阪等の解放運動の実践で、解放子ども会が大学を訪問したり、大学生が学校に来て子どもたちの学習をサポートしたりする学力保障の取り組みを聞いてうらやましく思いつつ、教育大学との物理的な距離が立ちほだかっていた。

それでも金川校区では子どもたちの意識に「大学」を入れていくため、一九九七年に金川中の二年生の総合的な学習の一つとして上級学校体験を始めた。体験を機に大学進学をめざす子どもの姿も見られるようになっていたが、金川の子どもたちが日常生活で当たり前に大学生の姿を目にする環境になるまでには至らなかった。

二〇〇一年、大阪大学の池田寛先生を通じて福岡教育大学の金泰泳先生（現在は東洋大学社会学部）とつながりが持て、小学校に大学生が来てくれた。年に一回の訪問だったが、高学年を中心にたくさんさんの教室に分かれて

入ってもらった。

翌年にも、金先生は大学生を大勢連れてきてくれた。そのなかに、田川出身で教育大に進んだものの、卒業後の進路をどうしようかと迷っている学生がいた。「人権同和教育の現場にふれながら卒業論文を書きたい」という申し出を金川小学校は喜んで受け入れた。当時、校内の解放子ども会では解放劇に取り組んでいて、「子どもたちの劇の質を高めると同時に大学に触れさせたい」という子ども会指導者の願いを受けて、彼は教育大の演劇部の学生とつないでくれた。現在、彼は田川市内の小学校教員になり、人権同和教育の研究大会で実践報告をするなどがんばっている。「金川の子どもたちの屈託のない笑顔にふれて、迷いが吹っ切れました」と彼は語ってくれた。学生にとっても意味のある学校訪問だった。

三 子どもにとつての「大学生」の意味

二〇〇三年には大学生訪問は実現できなかったが、〇五年秋、人権同和教育や地域との協働教育に関心をもった二人の教育大生から、「現場にふれながら卒業論文を書きたい」という申し出があり、小学校に毎週一回定期的に来てもらい、子どもたちと関わってもらえるように

なった。二人の学生には金川の子どものための「大学観（大学という単語は知っているが、自分には関係ないところと「給っている」とその背景にある生活環境について話し、「給食時間や休み時間などに大学生活の話をして欲しい」と頼んでいた。学習応援団の一人として授業に関わってもらったり、時には子どもと一緒に人権学習に参加して意見を言ってもらったりした。

私は沖縄出身で、部落問題についての授業は小中高で受けたことはありません。大学の講義で聴いても、どうしてそんな差別があるのかよく分かりませんでした。今日、子どもたちと一緒に授業を受けて、私の心の中にも当時の人たちと同じように部落差別をしてみよう心があることに気づきました。異質と感じたものを排除してしまうおもうとする意識がないかこれから気をつけていこうと思います。今日の授業はともたためになりました。（解放令の授業後のふりかえりより）

時には手伝わってもらい、時には一緒に学び・遊ぶなかで、少しずつ大学生と子どもたちの関係が自然なものになっていった。

さらに、秋の終わり頃には、田川市内にある福岡県立大学と田川市教育委員会が協働で実施していたT A（ティーチング・アシスタント）事業で、県立大の学生も定

期的に来てくれるようになり、金川小学校はいろいろな大学生と出会える場所になった。休み時間になると大学生先生の手を取って校庭に遊びに出たり、授業中に作業を手伝ってもらったりする子どもの姿が日常的に見られるようになった。

三月、卒業までのカウントダウンが始まった頃、六年生で「大学って何？」と題して、聞き取りを行った。教育大・県立大それぞれの学生にシンポジストになってもらい、大学に進学した理由や、大学での授業の様子、サークル活動、様々な府県から集まった友だちのことなど、改めて大学生活について語ってもらった。

◇ 私はこれまで、大学は難しい勉強ばかりするところだと思っていました。今日話を聞いて、休み時間に行き物に行ったり、サークル活動をするの聞いてなんだか楽しそうだから、私も大学に行こうと思いました。

◇ 私は大学に行く気はありませんでした。でも今日、授業がない日があったり、アルバイトをしたりすると初めて知りました。僕も、高校を出たら大学に行ってもいいなと思いました。

（「大学って何？」ふりかえりより）
これまでも子どもたちの耳に大学に関する情報は入ってはいただろうと思う。しかし、「自分には縁のないと

ころ」と無意識に判断して情報をシャットアウトしてしまっていたのだらうと思う。そんな子どもたちの「大学観」を崩すことができたのは、学生との日常的な関わりがあったからこそだと思う。生活地域に当たり前にたくさんの方の大学生がいて、大学生の行動や大学に関する情報が日常的に入ってくる地域では必要ないことかもしれないが、旧産炭地・筑豊、とりわけムラの子どものたちの未来を切り拓くうえで、大きな意味のある大学とのつながりである。

四 学生にとってのTA

田川の学校と大学生との交流について、引率した金先生は次のように意味づけている。

数年前から断続的にですが、福岡教育大学の学生が田川市の小学校や子ども会活動の場に参加させていたとき、子どもと交流したり教育実践を見学させていた。ただ取り組みを行っています。この取り組みは、子どもたちだけに「効能」があるのではなく、参加した学生にも大きなインパクトを与えています。学生たちは、帰りの車中興奮が冷めやらないといった感じでした。彼らはそのとき三年生も終わりを迎えようとする時期

でしたが、「もっと早くにこういう機会がほしかった」「すべての学生にこうした機会をもたせるべきだ」と熱っぽく語っていました。

また、二〇〇五年から大学の同和教育の授業を中野直毅先生に担当していただき田川の先生方に入れ替わり立ち替わりサポート講師として御登壇いただいています。この授業も学生たちにとってはたいへん刺激的な機会となっており、こうした経験を通じて学生たちの意識は大きく変わってきています。

教育大学に来る学生がすべて、教職を強く志向しているというわけではありません。学生たちはみな若く、当然、進路にも迷いが出ます。「自分はほんとうに教師に向いているのだろうか？ほんとうに教師になりたいのだろうか？」金小に行かせていただいた私の指導学生もそうした学生の一人でした。彼はそれまで自分の進路を明確に定めることができませんでした。しかし、金小での取り組みや、子ども会での子どもたちとの交流、田川の先生方の教育実践を知り、彼の意識はがらっと変わりました。「やっぱり教師になります。」彼はある日そう言いました。彼は、新卒時の採用試験には間に合わなかったのですが、翌年見事合格し、現在、田川市の小学校で教員をしています。

田川の子どもたち、先生方、そして保護者のひたむきな姿をみて、心が揺さぶられない者はいません。

〔金川の教育改革〕編集委員会編者『就学前からの学力保障』より）

福岡県人権・同和教育研究大会のシンポジウムでの学生たちの声を紹介する。

◇ 小学校に入ってまず感じたことですが、低学年は「おんぶして」と抱きついてくるんですよ。もし自分が先生（という立場）だったら、こんなに「おんぶして」と言われるかな。多分、学生よりは少ないだろうな、と思います。

子どもたちは、僕たちを「お兄さんの存在」として求めているのかなと感じました。関わっていく中で、「おんぶして」とスキンシップを求めてくる子は、家庭での愛情が足りていないのでは、と思いました。なので、僕は、スキンシップを大切にして体で子どもたちとかわかっていこうと思っています。

◇ やってみたいと思うことが、いたるところにある学校になっていったらいいんじゃないかと私は思います。やってみたいことが見つかったときの子ども顔は、すぐくうれしそうで、楽しそうで、きらきらしています。やってみたいことがあると、それをすぐく楽しみにし

て学校に行けると思います。

◇ 私は小学校の時から、ずっと学校が好きだったので、「学校が好き」「学校が楽しい」という子どもが、いっぱい増えたらいいなと思います。具体的には、学校に、生徒と先生だけの社会ができるんじゃないかと、もつといるんな世代の学生ボランティアや地域のおじいちゃん、おばあちゃん、保育園や幼稚園の子が、行きやすい場所として学校があつたらいいなとすぐく思います。（『ウインズ』49号「福岡県人権・同和教育研究協議会」より）

五 おわりに

ボランティアとして学校に入り子どもたちにかかわる学生の声を聞いた参加者からは、次のような発言が出された。

◇ 学生たちのことばで、現場に入って、子どもたちの横にいて思うことを聞かせてもらって、原点にもどることができたように思います。

日々忙しい中、「ゆとりがない」となげく教師、生活に疲れている教師はたくさんいます。自分もその中の一人です。

しかし、自分が学生のころ、新採のころ、「こんな教師になりたい」とめざしていた自分を思い出すことができず。 「もつと子ども一人ひとりに目を向け、心を傾け、子どもの立場に立って…」言葉としては簡単、しかも当然と思っていたこと、大事なことなのに、新鮮に感じたシンポジウムでした。来てよかったと思います。

そういえば、放課後、子どもたちと話す時間をもてていませんね。

◇ 実際に、学校の先生として活動されている方のお話、参考になりました。できること、できないことの間で、ジレンマを感じていらっしゃる先生も多いかと思えます。もつともつとオープンに、学生ボランティアを活用してほしいです。学生が自らはいることは難しいけれど、求められれば、多くの学生がお手伝いできると思えます。

学生がかかわる中で、こんな分野の仕事があるんだとか、自分とは全く違う人生を歩んでいる人がいるんだということを知り、世界が広がればいいなと思っています。

(『ウインズ』49号より)

田川では、大学生が小中学校にボランティアに入るた

めの条件整備は、大学・小中学校双方に広がってきている。様々な創意工夫・発想の転換で学校を子どもたちにとって居心地がよく、様々な可能性を引き出す場としてさらに教育的なものにしていける可能性はまだあると感ずる。

金川小の場合、当初、大学との物理的な距離を感じていたが、交流を始めると、学生は毎週来てくれている。さらに看護系・福祉系の学部がある県立大学が校区のすぐ傍にあり、教育学部ではなくても学生との日常的なふれあいを通じて子どもたちの進路意識を変えていくということ、TA事業をしてみてもわかったことだった。今では、活動資金を小中学校で確保してTA事業を実施している。もちろん、大学生が来さえすればいいということではなく、関係者の熱意と信頼関係があつてこそその教育的効果である。

それは子どもにとってだけでなく、教師をめざす学生はもちろん、たとえ教職の道を選ばなくても、一社会人を人権・同和教育の現場に触れもらいながら育てるという意味で「人権のまちづくり」にとつても意味あることだと考える。そして未来の学校にとつても…。